

一人一人に寄り添い、安心して話せる関係づくりについて

不登校児童の状況

対象児童は、集団への不適應があり、教室での学習が難しい状況が見られ、欠席が多かった。保護者は、登校を望んでいるが、学習や友達関係の困難さから当該児童の学校生活への拒否感が強かったり、登校しても教室に入ることができなかつたりする状況が見られた。

具体的な取組

○学校でできることを増やす

児童の興味・関心をもてるような学習内容や教材を担当が用意することで、支援員と一緒に校内別室で集中して取り組む時間を増やすことができた。



○学校生活における援助希求

当該児童にとって、集団で過ごすことが難しい時には、校内別室を利用することで安心感をもてるようにした。SOSの出し方については、教員の指示のもと、支援員が当該児童に対し、繰り返し伝えた。当該児童への丁寧な関わりにより、当該児童の状況に応じた支援ができた。

○活動場所を選択する

校内別室で過ごすことで気持ちが落ち着き「皆と同じように取り組みたい」という気持ちが見られた。そこで、教室前の廊下で過ごす選択肢も提示するなど、当該児童の自己決定を大切にした。



○教室に復帰した後も支援を受ける

支援員と対話することで、気持ちのコントロールが難しい時でも落ち着けるようになることが増えた。対話を通して活動の見通しをもてるようにしたり、担任の先生との関わり方を工夫したりすることで、当該児童が自分の気持ちを切り替えられることが増えた。

成果

昨年度からの継続的な支援により登校が安定してきた。担任と支援員との支援状況の共有により当該児童が集団での学習に参加することが増えた。当該児童の登校が安定することで、保護者の学校への信頼感も高まり、学校と保護者との協力体制の強化にもつながっている。

課題

当該児童を含め、個に応じた関わり方、担任との連携が課題である。当該児童のように保護者と登校するが学校で保護者と離れることが困難な場合の支援員との関係づくりが難しい。